

44 かわのうち 川ノ内のニッポンタチバナ 2株



指 定 町指定天然記念物 昭和 57 年（1982）3 月 30 日

所在地 斗賀野 川ノ内

分 類 ミカン科 ミカン属

大きさ （上下 2 株あり、下を好バケ 1、上を好バケ 2 とする）

【好バケ 1】根元周り 約 86センチ 樹高 約 7.8メートル

【好バケ 2】根元周り 約 62センチ 樹高 約 7.1メートル

樹 齢 【好バケ 1】約 110 年 【好バケ 2】約 80 年

国道 494 号斗賀野トンネルの須崎側口から約 1 キロ下流の左岸にある。河原から 22 メートル上方に好バケ 1 があり、更に 13 メートル上方に好バケ 2 がある。この株は平成 29 年（2017）の調査により新たに発見されたものである。

石灰岩の厳しい条件の中で果実を付けているが、周辺の人工林が大きくなってきており早急な保護が必要となっている。

45 ふか お し とめ ぎ 深尾氏お留木のヤマモモ 1 株



白実のヤマモモ

指 定	町指定天然記念物 平成 24 年（2012）2 月 7 日
所在地	加茂 ながたけ 長竹
分 類	ヤマモモ科 ヤマモモ属
大きさ	目通幹周り 約 2.19メートル 株立ち周り合計 約 3.44メートル 根元周り 約 3.7メートル 樹高 約 15メートル
樹 齢	約 260 年

沿海部の山野に自生する常緑高木。しゅういしゅ雌雄異株。白実のヤマモモで、樹勢は旺盛である。

「深尾氏お留木のヤマモモ」として伝わっている。深尾氏は実の熟す頃、ヤマモモ狩りに興じたが、領主の採取した残りは領民にも下げ渡されたので、樹木を損傷せぬように恐る恐る頂戴したという話が残っている。当時、お留木のヤマモモは、赤実のものを含め、数本あったといわれている。

46 さ かわちょう 佐川町のホタル



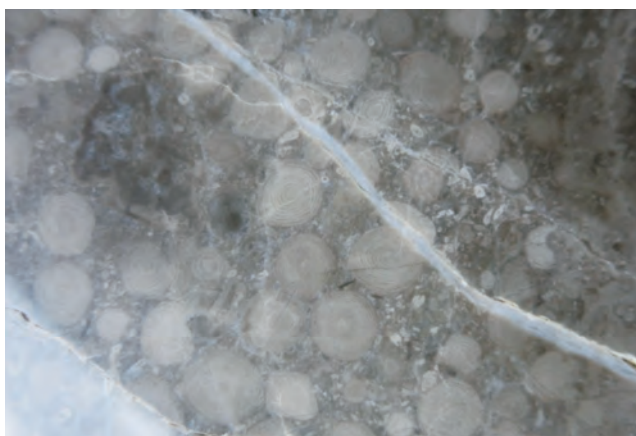
ゲンジボタル（左）とヘイケボタル（右）

指 定	町指定天然記念物 昭和 48 年（1973）4 月 20 日
所 在 地	佐川町全域
分 類	コウチュウ目（ しょうしゆく 鞘翅目）ホタル科

ゲンジボタルとヘイケボタルが主で、特に斗賀野野添の斗賀野川、尾川川全流域をはじめ、黒岩中学校前の原谷川等、佐川町全域に生息する。

佐川町では平成 3 年（1991）「佐川町ホタル保護育成条例」を制定して捕獲の禁止や罰則を設け保護育成に努めている。

47 こ や つ じ か せ き さ ん ち 小谷地化石産地



紡錘虫（ネオシュワゲリナ）の化石

指 定 町指定天然記念物 昭和 48 年（1973）4 月 20 日

所在地 佐川 ^{かみごう}上郷

年 代 古生代 ペルム紀

^{ぼうすいちゅう}

紡錘虫（ネオシュワゲリナ）、巻貝（オキナエビス類他）の化石を産出する。

48 そう ほう い ん か せ き さ ん ち 蔵法院化石産地



二枚貝（ダオネラ）の化石

指 定 町指定天然記念物 昭和 48 年（1973）4 月 20 日

所在地 佐川 ^{かみごう}上郷

年 代 中生代 ^{さんじょうき}三畳紀

二枚貝（ダオネラ）、頭足類の化石を産出する。

49 よし だ や し き か せ き さ ん ち 吉田屋敷化石産地



シダ類（グレイケニテス的一种）の化石

指 定	町指定天然記念物	昭和 48 年（1973）4 月 20 日
所在地	佐川 むらさきえん いしきり ざか 紫園 石切坂	
年 代	中生代 ジュラ紀	

シダ類、三角貝（トリゴニア）の化石を産出する。

50 こ う ち が た に か せ き さ ん ち 川内ヶ谷化石産地



二枚貝（モノチス）の化石

指 定	町指定天然記念物	昭和 48 年（1973）4 月 20 日
所在地	佐川 こ う ち が た に 川内ヶ谷	
年 代	中生代 さんじょうき 三畳紀	

二枚貝、巻貝、腕足類、頭足類の化石を産出する。モノチスは多産する。

51 かい せき やま か せき さん ち 介石山化石産地

シダ類の化石



グレイケニテス的一种



スフェノプテリスの一種



クラドフレビスの一種

指 定 町指定天然記念物 昭和 48 年（1973）4 月 20 日

所在地 佐川 ^{しもやま} 下山

年 代 中生代 白亜紀

^{し うん やま} 紫雲山ともいわれるこの山中から、^{きゅうか} シダ類、球果類、ソテツ類、二枚貝の化石を産出する。

52 とり す せつ かい がん 鳥の巣石灰岩



ウニ類(フィルマキダリス)の化石



鳥の巣石灰岩で形成された聖嶽（尾川西山）

六放サンゴ類の化石

エオハイドノホラの一種（左）
スチリナの一種（右）

指 定 町指定天然記念物 昭和 48 年（1973）4 月 20 日

所在地 佐川 ^{とり す} 鳥の巣周辺

年 代 中生代 ジュラ紀

鳥の巣石灰岩は明治 8 年（1875）に来日し、わが国の地質学発展の基礎を築いた H.E. ナウマンによって、明治 18 年（1885）、鳥の巣周辺に模式的に露出する石灰岩を「鳥の巣石灰岩」と定義したことから始まる。

九州から関東山地にかけての秩父累帯中・南帯に断続的に分布する鳥の巣層群及び相当層に、周囲の地層に対して整合な場合と異地性岩体として含まれる場合がある。^{あん かい しよく} 暗灰色をした礫性の石灰岩で、^{ろっぽう} 六放サンゴ類・^{そうこうちゅうるい} 層孔虫類・二枚貝・^{わんそく るい} 巻貝・腕足類・ウニ類等の化石を多産する。^{でい しつ ぶつ} また、泥質物を多量に含むため、ハンマーで叩くと石油臭を発する特徴がある。

※[47]～[52]の町指定文化財で掲載した化石類は佐川町立佐川地質館蔵

53 さ かわ 佐川ナウマンカルスト



指 定	町指定天然記念物 昭和 61 年（1986）12 月 22 日
所在地	佐川 むらさきえん 紫園

標高 160 メートルの尾根から斜面の中腹にかけて、特異な形の石灰岩が密集して露出する小規模ながら県下でも珍しいカルスト地形である。

ドイツの地質学者 H.E. ナウマンによる四国での調査は数回にわたるといわれるが、佐川には二度訪れ中生代三畳紀の二枚貝（ハロビア）さんじょうき の他、ジュラ紀の植物や三角貝を確認し報告した。

この公園は H.E. ナウマンの来町 100 周年を記念して昭和 61 年（1986）に造られ、町は地質学を志す人々が一度は足を運ぶ「地質のメッカ」として知られるようになったことに感謝し「佐川ナウマンカルスト」と命名した。広さが 2 ヘクタールある。

佐川町には町立「佐川地質館」があり、化石資料などとともに県下の地質について紹介している。

■ 国登録有形文化財

1 きゅうはま ぐち け じゅう たく しゅ おく
旧浜口家住宅主屋 1 棟



登 録 国登録有形文化財（建造物） 平成 27 年（2015）3 月 26 日

所在地 佐川 ^{にしまち}西町

年 代 明治時代初期

浜口家住宅は明治時代初期に建築されたと推定される。それは母屋座敷の違い棚に深尾家の家紋である「梅鉢紋」^{うめばちもん}の金具が使用されており、明治 2 年（1869）に取り壊された深尾土居屋敷の書院が移築されたものであると伝えられている。

浜口家の出自は、天正の頃、長宗我部家の家臣であったが、江戸時代後期に須崎より佐川に来て酒造業「生金屋」^{あらかねや}を営んだ家系で、「野菊」なる銘柄の酒を醸造販売した。

大正 7 年（1918）、黒金屋、黒金屋出店、浜口酒造の 3 軒が合併して佐川醸造株式会社（司牡丹酒造株式会社の前身）となる。

平成 22 年（2010）、「歴史的風致維持向上計画」の事業により町が購入し、その後の改修を経て、旧商家の趣を残す建造物として活用されている。